

トップ > ヘルス > 記事

### 睡眠薬・抗不安薬、高齢者が「廃人」になるリスクも...医者が処方する裏事情

坂口直, 辰濃哲郎 2020.2.2 07:00 AERA #シニア #ヘルス #介護を考える  
PR 北陸最大のパラボラアンテナでデータ収集! 福井工業大学の今後の展開



病院によっては、投薬でベッドに寝たきりの状態にされているケースが少なくないことが関係者の証言で明らかになった (撮影/写真部・松永卓也)

Q 拡大

「歩行がおぼつかない」「会話が通じない」——。元気だった親の異変に気づいたら、まず投薬の影響を確かめたい。放っておくと、一気に症状が進んでしまう。高齢者には危険な睡眠薬や抗不安薬が、病院や施設で日常的に処方されている。AERA2020年2月3日号は、日本の医療のひずみをあぶりだす。

【国内でよく使われているベンゾジアゼピン (BZ) 系の睡眠薬・抗不安薬はこちら】

\* \* \*

自分の親が病院にかかった途端、それまでとは別人のように変わり果ててしまったことはないだろうか。

認知機能の低下や歩行がおぼつかなくなる。幻覚や暴言を吐いて暴れる。逆に元気がなくなって寝たきりになってしまう。親の急変ぶりに狼狽 (ろうばい) したと嘆くケースをよく聞く。「高齢者にはよくあること」と説明されるが、実は「薬剤起因性老年症候群」といい、医師に処方された薬が原因の場合が少なくないことが最近になってわかってきた。

最近というのは日本の場合で、海外ではかなり以前から危険性が指摘されながら、放置されてきた。実態を見かねた学会や減薬に取り組む医師たちが、やっと声を上げ始めた状況だ。

兵庫県立ひょうごこころの医療センターの小田陽彦・認知症疾患医療センター長が原因薬としてもっとも危険だと指摘するのは、ベンゾジアゼピン (BZ) 系の睡眠薬・抗不安薬だ。

2016年3月、80代の女性が娘に連れられてやってきた。夫と死別して塞ぎ込み、精神科を受診して認知症などと診断され、抗認知症薬とBZ系の抗不安薬などが処方された。その直後から、生気が失せてこたつで過ごすことが多くなったという。歩行もゆっくりで、娘との電話も要領を得ない。来院したときの認知症診断のミニメンタルステート検査 (MMSE) は30点中17点だった。23点以下は認知症の疑いだが、MRIで海馬の萎縮は見られない。

小田医師は薬を疑った。徐々に減らしていくと、動きが機敏になってきた。表情に明るさが戻り、会話もできる。レビー小体型認知症の疑いは残るものの、MMSEは24点まで上がり、いまはデイサービスにも通えるまでに回復している。BZ系薬剤が、認知機能や運動機能の低下と、過度に鎮静化され寝たきりなどになる「過鎮静」を招いたと小田医師はみている。

「あのままだったら、寝たきりになって亡くなっていた可能性が高い」 (小田医師)

#### 国内で75歳以上によく使われている主なベンゾジアゼピン(BZ)系睡眠薬・抗不安薬

製品名	成分名 (後列品名)	年間処方数 (75歳以上、錠)
デバス <sup>※1</sup>	エチゾラム	4冊2157万
レンドルミン	プロチゾラム	2冊3814万
マイスリー <sup>※2</sup>	ソルピデム酒石酸塩	2冊1811万
ゾラオックス コンスタシ	アルプラゾラム	1冊644万
ハルシオン	トリアゾラム	9428万
ルネスタ <sup>※2</sup>	エスゾピクソン	6635万
ザイレムスル <sup>※3</sup>	フルニトラゼパム	5735万
セルシン/ホリゾン	ジアゼパム	5208万
ワイバックス	ロラゼパム	4303万
メイラックス	ロフラゼパムエチル	2584万

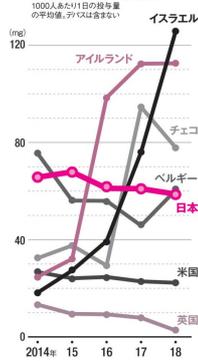
主な副作用 過鎮静、認知機能低下、せん妄、転倒・骨折、運動機能低下など (非BZ系類似の有害作用の可能性もある)

2017年、※1 高知分室上は「精神神経作用」だが、作用機序が不明なため、表ではベンゾ系として含めず、※2 マイスリー、ルネスタはベンゾ系特有の化学構造を持たず、「非BZ系」だが漢字を載せて「BZ系」と呼ばれている。※3 ロラゼパムは18年に販売中止

AERA 2020年2月3日号より

Q 拡大

#### 睡眠薬の消費量



AERA 2020年2月3日号より

Q 拡大

トップ > ヘルス > 記事

# 睡眠薬・抗不安薬、高齢者が「廃人」になるリスクも...医者が処方する裏事情

坂口直, 辰濃哲郎 2020.2.2 07:00 AERA #シニア #ヘルス #介護を考える  
PR 北陸最大のバラボアンテナでデータ収集! 福井工業大学の今後の展開



病院によっては、投薬でベッドに寝たきりの状態にされているケースが少なくないことが関係者の証言で明らかになった (撮影/写真部・松永卓也)

Q拡大

このケース以外にも、認知機能が低下して万引きを繰り返す女性が、BZ系薬剤を中止したらMMSEが24点から30点に回復し、盗癖がピタリとやんだケースなど、薬を減らしたら認知機能が回復した症例を数多く経験している。患者のかかりつけ医とのやり取りで感じるのは、BZ系の危険性を知らない医師が多すぎるということだ。

「知識のアップデートをせず、いわば不勉強。自分の薬が原因ではないか、という意識を持つべきだ」と小田医師は話す。

人生の締めくくりを迎える晩年に、夢を追いかけている人もいれば、家族や友人との語らいや、旅を望む人もいるだろう。そうした時期に薬剤によって不本意に自分を失い、「廃人」にさせられることは、尊厳を奪われたも同然だ。

親や自分の身は自分たちで守るしかない。もしBZ系薬剤を処方されたら、依存性があるので短期に限定し、記憶や歩行に異常を感じたら医師に相談したほうがいい。

そもそもBZ系薬剤とはどのようなものなのか。

1960年代に開発され、安全という触れ込みで世界に広まった。日本の睡眠薬・抗不安薬のほとんどはBZ系で、後発品も含めて150種類ほどある。

80~90年代初めにかけて欧米では、その副作用が指摘されていた。代謝が悪く排泄(はいせつ)能力も低下している高齢者には効き過ぎて、過鎮静の症状や認知機能、運動機能の低下などを招くリスクがある。82年にカナダの保健福祉省が「高齢者は注意深いモニタリングがとくに重要だ」などと警鐘を鳴らした。米国で老年医療のバイブルとも言われているピアーズ基準でも、91年に注意が喚起され、最近の改訂版では「使用を避けるように」と記されている。

この問題を掘り下げていくと、さらに医療のひずみが生んだ闇を知ることになる。

関東地方の療養型病院の男性職員は、病院でのBZ系薬剤の使われ方に疑問を感じていた。

腰椎(ようついでい)を骨折した80代の女性は、熱心にリハビリに取り組んだおかげで歩けるようになった。軽い認知症だが、意思疎通もでき、男性職員の姪にマフラーを編んでくれるほど元気だった。

## 国内で75歳以上によく使われている主なベンゾジアゼピン(BZ)系睡眠薬・抗不安薬

製品名	成分名 (後発品名)	年間処方数 (75歳以上、錠)
デバス <sup>※1</sup>	エチゾラム	4冊2157万
レンドルミン	プロチゾラム	2冊3814万
マイスリー <sup>※2</sup>	ソルピデム酒石酸塩	2冊1811万
ゾラックス/コンスタン	アルプラゾラム	1冊644万
ハルシオン	トリアゾラム	9428万
ルネスタ <sup>※2</sup>	エソピクロン	6635万
サイレスタ/ロヒプソール <sup>※3</sup>	フルニトラゼハム	5735万
セルシン/ホリゾン	ジアゼハム	5208万
ワイバックス	ロラゼハム	4303万
メイラックス	ロフラゼパム酸エチル	2584万

主な副作用 過鎮静、認知機能低下、せん妄、転倒・骨折、運動機能低下など(非BZ系類似の有害作用の可能性もある)  
2017年、※1 高齢分型上は「精神神経作用」だが、作用機序が異なるため、表ではベンゾ系として含めず、※2 マイスリー、ルネスタはベンゾ系特有の化学構造を持たず、「非BZ系」または漢文字を取って「Z系」と呼ばれている ※3 ロヒプソールは18年に販売中止

AERA 2020年2月3日号より

Q拡大

## 睡眠薬の消費量



AERA 2020年2月3日号より

Q拡大

トップ > ヘルス > 記事

# 睡眠薬・抗不安薬、高齢者が「廃人」になるリスクも...医者が処方する裏事情

坂口直, 辰濃哲郎 2020.2.2 07:00 AERA #シニア #ヘルス #介護を考える  
PR 北陸最大のバラボロアンテナでデータ収集! 福井工業大学の今後の展開



病院によっては、投薬でベッドに寝たきりの状態にされているケースが少なくないことが関係者の証言で明らかになった (撮影/写真部・松永卓也)

Q拡大

ところが、病院ではスタッフが不足していて、夜間に歩き回る患者に付き添えない。転倒ですれば骨折のリスクがあるため、おとなしくさせるために女性にBZ系薬剤が処方された。直後から元気がなくなり、車いすに座らせても体が傾き、会話も通じない。見舞いに来た家族がショックを受けるほどだった。

「まるで廃人にさせられているようだった」 (男性職員)

この病院には、BZ系薬剤の副作用で、昼間でも鎮静化させられている患者が3割近くいるという。「管理のために薬剤で事実上の身体拘束をしている」と男性職員は話す。

薬剤によって患者を鎮静化させるのは、この病院に限ったことではない。関東の特別養護老人ホームの看護師からは、衝撃的な言葉を聞いた。

「患者を落とす」

夜中に歩き回ったり、点滴を抜いたりしてしまう患者に対して、介護スタッフや看護師の要望で医師にBZ系薬剤を処方してもらうことを、こう表現しているのだという。意識レベルを落とすことからきた隠語らしい。

スタッフ不足にあえぐ日本の療養型病院でのBZ系薬剤の使用は、まさにパンドラの箱だ。歩き回る患者を放っておけば転倒のリスクがあるし、それが問題だとなれば、自宅に引き取ってもらうことになりかねない。超高齢化社会に対応できない医療の姿が浮き彫りになる。(医薬経済社・坂口直、ノンフィクション作家・辰濃哲郎)

※AERA 2020年2月3日号より抜粋

※後編「高齢者の睡眠薬・抗不安薬の危険なぜ放置? 副作用が明記されない背景」へ続く

## 国内で75歳以上によく使われている主なベンゾジアゼピン(BZ)系睡眠薬・抗不安薬

製品名	成分名 (特許品名)	年間処方数 (75歳以上、錠)
デバス <sup>※1</sup>	エチゾラム	4億2157万
レンドルミン	プロチゾラム	2億3814万
マイスリー <sup>※2</sup>	ソルピデム酒石酸塩	2億1811万
ゾラックス/コンスタン	アルプラゾラム	1億644万
ハルシオン	トラiazolam	9428万
ルネスタ <sup>※2</sup>	エソピクロン	6635万
サイレムス/ロヒプタール <sup>※3</sup>	フルニトラゼハム	5735万
セルシン/ホリゾン	ジアゼハム	5208万
ワイバックス	ロラゼハム	4303万
メイラックス	ロフラゼパムエチル	2584万

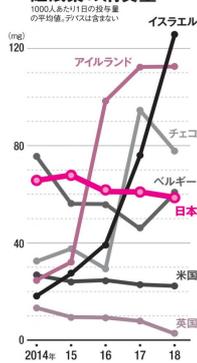
主な副作用 過鎮静、認知機能低下、せん妄、転倒・骨折、運動機能低下など(非BZも類似の有害作用の可能性がある)

2017年、※1 高剤分錠上は精神神経作用(だが、作用機序が異なるため、表ではベンゾ系として含めず)、※2 マイスリー・ルネスタはベンゾ系特有の化学構造を持たず、「非BZ」または薬文字を取って「Z系」と呼ばれている ※3 ロヒプタールは18年に販売中止

AERA 2020年2月3日号より

Q拡大

## 睡眠薬の消費量



AERA 2020年2月3日号より

Q拡大